

山崎郷土叢

No. 78

3. 9. 5

兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
山崎郷土研究会
電話 62-2000

近世初頭の山崎藩(三十六)

島田清

二、池田輝澄時代

○池田光政の忠言(続3)

六、池田光政の忠言(続)

寛永十六年秋、備前岡山藩主池田光政が、家士、牧野能登守を使者として、輝澄に申入れた忠言(前号に掲載)三ヶ条のうち、最も重要な意味をもつのは、いうまでもなく、第一条である。この条は、輝澄の寵臣、菅友伯に暇をやるか(召放すこと、すなわち、浪人させること)、光政の手もとに預かるか、どちらかの処置を求めたものであるが、この「預かる」について、少し、説明してお

目次

①	近世初頭の山崎藩(三十六)……………島田清……………	1
②	上町村宗門改帳……………久保寅夫……………	4
③	金屋村鋳物師長谷川氏の研究(二)片山昭悟……………	7
④	明治維新の話……………堀口春夫……………	10
⑤	春の研修旅行……………大上善示……………	14
⑥	経緯度標設置…………………………	16
⑦	事務局だより…………………………	18

こう。

幕府が、罪状の確定したものの中、「諸家預け」として、諸国の大名に預けることは古くから行われた。預けられているうちに病死する者もあったが、一定期間を過ぎて、許されたものもある。また、この間に刑が定まり、処刑されたものもある。元禄十五年(一七〇二)十二月十四日夜、吉良邸に討ち入り、亡君浅野長矩の仇、吉良義央の首級を取った赤穂浪士達が、幕命によって、細川越中守綱利邸へ大石良雄以下十七人、松平(久松家)隠岐守定直邸へ大石良金以下十人、毛利甲斐守綱元邸へ岡島常樹以下十人、水野監物忠之邸へ間光興以下九人、とそれぞれ分預されたことは多

くの人を知るとおりである。これらの四十六人は、翌十六年二月四日、刑が定まり、それぞれの邸で切腹し、泉岳寺に葬られた。

また、世に「駿河大納言」として知られる徳川忠長（將軍秀忠の第三子で家光の実弟、駿府城五十五万石の主）が、乱行から大逆の罪を負うて寛永九年十月、上野国高崎藩主安藤重長に預けられ、翌十年十二月六日、自刃を命ぜられたことも名高い。

「諸家預け」というのは、このように、「罪を得たものを暫く預ける」という処置を指したもので、一般には、「事故のないようにして預かっている」というのが任務とされていた。しかし、複雑な世相を反映して、必ずしも、このように単純な「預かり」だけで終始しなかったものもある。これは、深い思慮に立って、その人物を処理する、といった含みをもって行われたもので、伊賀越道中双六^{せうろく}で人口に膾炙^{かいしや}する荒木又右衛門の伊賀上野城下における渡辺数馬復讐^{ふくしやう}助太刀事件の後に起こった「預かり」に、その顕著な例がみられる。

この事件は、寛永十一年（一六三四）、伊賀国上野城下、鍵屋^{かぎや}の辻において、備前岡山藩士渡辺数馬が、姉婿^{あねむこ}荒木又右衛門の助太刀を得て、弟源太夫を殺害した同藩の河合又五郎に対して、仇討ちをしたもので、日本三大仇討の一つに数えられている。世上、荒木又右衛門の三十六人斬りと喧伝されるものの、実際に討ち取ったのは、当人河合又五郎と、それを助ける桜井半兵衛、河合甚左衛門とその槍持一人の四名である。事件後、幕府は、河合又五郎を助けた旗本久世三四郎以下にもそれぞれ処分を申し渡したが、

その中の一人、安藤甚右衛門が、事件の黒幕として、画策・謀略に重大なはたらきをしていたのをみていた阿波国徳島藩主の後見^{こうけん}蓬庵^{ほうあん}（前藩主蜂須賀家政）は、このままにしておくことは、今後、再び、風波を起こすにちがいないと考え、これを阿波藩預けとするよう幕府にはたらきかけ、それを実現させた。蜂須賀家政の嫡子至鎮^{よししげ}の女が池田忠雄^{ただかつ}（備前岡山藩主）に嫁し、その嫡子光仲が幼少の身であとを継いでいた関係上、再び、同藩中に風波の起こることを危惧したためであって、家政は、この安藤甚右衛門を自分の膝下に封じこめ、蠢動^{しゅんどう}させないようにしよう、と考えたのである。そして、それが許可されると、国許^{くにもと}の徳島へ護送する途中、海上で害し、死体を海中に投じたうえ、幕府へ、病死の届出を行ったのであった。

家政の行ったこの処置は、一見、無道に見える。いや、無道に見えるどころではない。はっきり無道である。今日、こうした実態が伝わっている事実からみて、当時にも、「全くわからなかった」

株式会社 安井書店

〒900-0700 山崎町山崎90
TEL 山崎 0700(代)

ということはあるまいし、幕府の隠密政策が特に阿波藩に厳しかったことは、吉川英治氏の名作『鳴門秘帖』などで、充分、察せられる。こうしたことから、幕府が、事件としてこれを取りあげ、阿波藩に対する何らかの処置を行うことは、当然、あつてしかるべきではないかと思われる。それであるのに、そのことなく、事件はそのままに葬り去られているのはなぜであろう。これには、当然、深い事情がなければならぬ。私は、それを、次のような事情からではないか、と推察している。

上野城下における仇討事件として天下の耳目を聳動したこの事件のそもそもの起りには、岡山藩池田家（当時の藩主は忠雄。死後、嗣子光仲が幼少であったため鳥取に転封された）の藩内に起こった藩士間の殺害事件である。ことの処理が、藩内で行われるのは当然のこと。これが藩内で済まなくなったのは、下手人の河合又五郎が旗本の久世三四郎のもとに身を寄せ、この久世を助ける旗本たちが団結して、岡山藩主池田忠雄に対抗したためである。当時、旗本と町奴（最も著名な人物としては幡随院長兵衛がある）、旗本と大名の対立抗争は熾烈で、いろいろの事件を起こしていたが、窮鳥のごとく飛びこんできた河合又五郎を助ける運動も、その中の一つとして起こっていた。岡山藩主池田忠雄の実母は、東照大神君（徳川家康）の二女督姫である。督姫は、姫路城五十二万石の太守池田輝政の正室として忠継・忠雄・輝澄以下の六男子を生み、その中の忠雄が岡山藩主となっていた。旗本衆が、抗争の相手とするには、このうえない相手である。これに一泡吹かせ、

旗本八萬騎の意地と実勢力を誇示しようという魂胆が、久世三四郎以下の旗本衆にあったから、事件は、拡大の一途をたどった。これには、当時の老中たちも手を焼き、適切な処置が行えぬままに日が過ぎていた。それだけに、この事件が、河合・渡辺という当事者同士の闘争によって終結したことは、老中達にとって何よりも喜ばしいことであり、安堵の胸を撫でおろしたにちがいない。『旗本対大名の抗争の頂点』であったこの事件が、こうして落着いた以上、今後、こうした事態の再現をなくする処置を、極力、講ずるのは為政者の当然のつとめである。蜂須賀家政のつとめた処置が、こうした老中たちの方針に合致するのを見ると、表向きの届書を受け取り、それで、ことが処理された、としても、何の不思議もないではないか。この事件の最終段階において、このような一事があつたことは、充分、記憶されてよいことであろうと、私は思う。

池田光政が、こうしたことまで老慮していたか、どうかは、もちろん、わ

最新型カラー現像機導入 カラープリント・スピード仕上げ

兵庫県市町村職員共済組合指定店
良い品を・安く・安心して買える店



兵庫県山崎町東鹿沢26-3 ☎62-2089

からない。光政の「忠言」そのものが残っているだけで、それを行なった前後の心境を書きのこしたものは残っていないからである。しかし、聡明な光政は、藩内騒擾の禍根が、この「菅友伯」にあることをはっきり見きわめ、これを藩内から取り除く荒療治に乗り出したのである。輝澄と光政とは叔父・甥の間柄であり、年令も六歳年少である。しかも、申入れ事態、藩の内政干渉に当たることは当然である。他からの見る目もいろいろあるうと思われる。しかし、それにもかかわらず、敢えて、この忠言を申入れたのは、このままに放置しては一

藩の存続が危くなる、との見通しを立てたため、これを救おうという重大決意のもとに行なったのであった。
受け取った輝澄に、光政のこの卓見と真情が、果して理解されたであろうか。

健康づくりの相談が気軽にできる店

ごころ薬局

薬剤師 岸本八重子
岸本弘子

山崎町東和通り・☎(0790)62-1190

上町村宗門改帳(三)

久保寅夫

第七十七号に一向宗人家御改帳を載せました。今回は、法華宗人家御改帳と、人数増減惣合帳と、宗旨御改三冊寄目録を載せま

文久三亥年 三冊之内三番
尼ヶ崎領
法華宗人家御改帳
三月
伊和組
上町村

法華宗山崎町
一妙勝寺

持高 拾五石八斗

年六十八

甚七[㊦]

同寺

年五十七

女房いく

同寺 年四十五

悴 清左衛門

同寺 年四十六

女房 と代

同寺 年十二

養子 安太郎

同寺 年十一

同断 善次郎

家内ノ六人内

男四人 女二人 牛壺疋

一妙勝寺

持高 壺石壺斗

年三十八

久 藏

同寺 年五十八

母 まち

同寺 年廿五

妹 ふみ

家内ノ三人内

男壺人 女式人

家数合式軒 去戌御改同断

人数合九人

内 男五人 女四人 牛壺疋

奥文言真言宗同様也

法華宗京都本國寺末寺

播州宍粟郡山崎町

文久三亥年

三月 妙勝寺

中嶋松治殿

吉原佐賀八殿

奥文言真言宗同様也

宍粟郡伊和組

文久三亥年

三月 上町村 年寄吉右衛門

中嶋松治様

吉原佐賀八様

奥文言真言宗同様也

大庄屋伊和

土居良左衛門

年同月

中嶋松治様

吉原佐賀八様

文久三亥年

伊和組

人数増減惣合帳

三月

上町村

一他領ヨリ縁付来ル者

定吉 女房 年十九 ひと

一生子 梶藏 男子 年二ツ 仲藏

一同断 清次郎女子 年二ツ ふさ

一同断 吟藏 男子 年二ツ 重右衛門

一同断 亀吉 女子 年二ツ いし

一相果被人源右衛門女房 年六十七 せて

一他領ヨリ不縁婦者 同人娘年四十二 ゆり

一御領分ヨリ縁付来ル者きぬ夫年四十一

文太郎事

米 藏

一相果被人 平七娘 年廿五 この

一生子 重左衛門女子年二ツ よし

一相果被人儀兵衛女房 年三十二 しゆう

一他領ヨリ縁付来ル者みせ養子年廿三 りか

一他領ヨリ縁付来ル者露藏養子年十四 てい

一生 子 同人女子 年二ツ かつ
一相果被入

勝左衛門粹 年三十五 米 蔵

一相果被入

新兵衛父 年五十六 市太郎

一相果被入

同人祖母 年七十六 はや

一相果被入

治兵衛父 年五十七 忠 助

拾八人

内

拾老人 増人

三人女 他領ヨリ縁付来ル者

内老人男 御領分ヨリ縁付来ル者

老人女 他領ヨリ不縁帰ル者

六人内 男 貳人

女 四人 生子

七人 減人

但男三人

女四人 相果被入

増減指引シテ四人増人

但し女

文久三亥年	伊和組
宗旨御改三冊寄目錄	
三月	上町村

真言宗

一家数合七軒

同断

一人數合廿五人内

一向宗

一家數合三拾五軒

内壹軒 道場

同断

一人數合百三拾三人内

内壹人出家

法華宗

一家數合貳軒

同断

一人數合九人内

男五人
女四人

三宗合

家數 四拾四軒 去戌 御改後壹軒増

内壹軒 道場

人數百六拾七人内 男八拾四人
女八拾三人

内壹人出家

内

拾老人 増人

三人女 他領ヨリ縁付来ル者

内老人男 御領分ヨリ引越来ル者

老人女 他領ヨリ不縁帰ル者

六人内 男二人 生子

女四人

右之外

七人 減人

内 男三人

女四人 相果被入

増減指引シテ四人増人

但し女

男高 八拾四人 内三拾九人 十七ヨリ

女高 八拾三人 五十迄 男

牛メ六疋

宍粟郡金屋村

鋳物師長谷川氏の研究(二)

片山 昭 悟

一・金屋村について

宍粟郡山崎町金谷は、江戸時代の「正保郷帳」・「天保郷帳」・「慶長播磨国絵図」には「金屋村」と書かれていたものが、明治時代になって「金谷」と改名されています。

「金屋」という地名は、鋳物師にちなんで付けられたものと考えられ、兵庫県内でも佐用郡上月町・美方郡温泉町などに「金屋村」が存在します。いずれも鋳物師と関連した村が多くみられません。

二・宍粟郡内の鋳物師について

宍粟郡内の鋳物師については、江戸時代の「諸国鋳物師名記」寛政六年(一七九四)の記録によると、播磨国の鋳物師の中に金屋村の長谷川孫兵衛・五郎兵衛の名があり、「諸国鋳物名寄記」文政十一年(一八二八)には、金屋村の長谷川氏二人とともに段村の松井氏一人が鋳物師として記載されています。

三・文化以前の播磨国鋳物師について

「諸国鋳物師文化以前名前写」という写本が、三重県桑名市の鋳物師中川祐次氏の旧蔵にあります。

文化以前とありますが、遑つても寛政・享和の頃(一七八〇～一八〇〇年頃)のものと考えられます。各地の鋳物師の名前が詳しく記載され、地名と治工と人数が書かれています。

その中には、金屋村鋳物師長谷川氏の記録もあり、長谷川姓が三人記載されています。

播磨国における鋳物師の地名、姓名および人数は、次のとおりになります。

播磨国

飾東郡姫路野里	芥田・瀬川・田中・尾上	十一人
越谷町	小野六太夫	一人
揖西郡中島	小野七左衛門	一人
三木郡安場	黒田	四人
佐用郡三ヶ月	井口・中山	四人
三木郡上町	石田	一人
多可郡茂利村	中山	一人
赤穂郡高田中野村	中井・中村	五人
佐用郡平福	瓜生原	一人
明石郡大久保町	正井	二人
宍粟郡金屋村	長谷川	二人
明石郡小神村	竹中	四人

以上、播磨国十二カ所であります。

卒 参考文献 卒

- 宇野正碓『宍粟鉄山並金屋鑄物史料』是川文庫 平成元年
- 建部恵潤「宍粟郡大字名私考」『歴史と神戸』第二十九卷三号 平成二年

- 坪井良平「徳川期における播・但両国の鑄物師」—主として直島製煉所の資料による—『兵庫史学』第三十七号 昭和三十九年

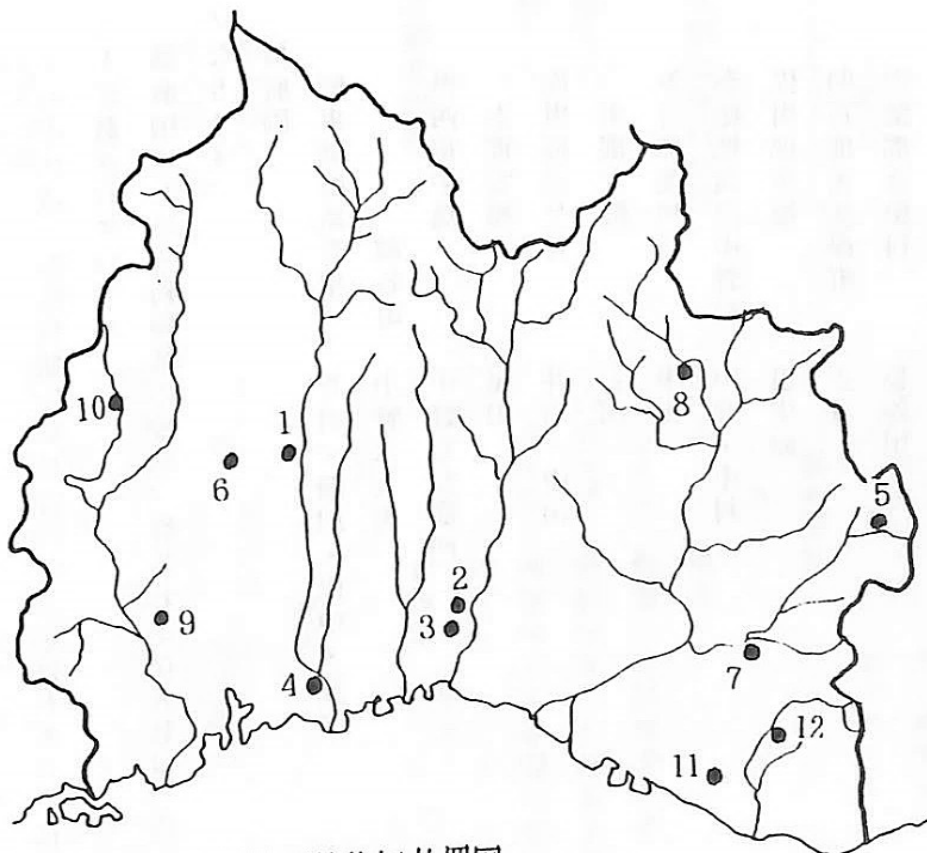
- 兵庫県『兵庫県市町村合併史』(上・下) 昭和三十七年

- 『慶長播磨国絵図』

- 「角川日本地名大辞典」編纂委員会『兵庫県』 昭和六十三年



第2図 宍粟郡金屋村 鑄物師長谷川氏位置図



第3図 播磨国鑄物師位置図

「諸国鑄物師文化以前名前写」より

播磨国鑄物師一覽表

	地名	姓名
1	宍粟郡金屋村	長谷川
2	飾東郡姫路野里	芥田・瀬川・田中・尾上
3	越谷町	小野
4	揖西郡中島	小野
5	三木郡安場	黒田
6	佐用郡三ヶ月	井口・中山
7	三木郡上町	石田
8	多可郡茂利村	中山
9	赤穂郡高田中野村	中井・中村
10	佐用郡平福	瓜生原
11	明石郡大久保町	正井
12	明石郡小神村	竹中

「諸国鑄物師文化以前名前写」より



明治維新の話

堀 口 春 夫

慶応三年十月、將軍慶喜は大政奉還をした。十一月には坂本龍馬、中岡慎太郎が京の近江屋で暗殺され、同年十一月には小御所会議の結果、慶喜は議員を罷免され王政復古の号令が出されるという物情騒然たる時勢を迎えた。あわただしい師走の押し迫ったある日、やわらかい冬陽を浴びた山崎藩の表御門の前に時ならぬ蹄の音を響かせ、長鳥帽子に大紋を着け三番叟の様なかっこうに皮の半長靴をはき騎馬にまたがった三人の使者に、詰襟の羅紗服を着た奇妙な姿の従卒数名を従え、「長州の使者で御座る、藩主にお取次ぎ下され」と門番に声をかけた。長州と聞いて驚いた門番は早速御使番の侍にこの由を告げ、御使番も長州と聞いては唯事ならぬと急ぎこの由を御家老に告げた、御家老は「うむ……いよいよ来たか、」兼て予期しない事でもないが、さて来たとなるとわが藩にはこれに対する良き対策を何等用意していなかった、致し方なく家老の武間四郎右衛門はひとまず使者を城内の客間に案内し御使者をもってその口上を聞いた。長州藩の使者の口上によると、「吾等長州藩は去る年幕府の第二次征長軍を打ち破り藩論を統一し、又此度は芸州藩並びに備前藩を征服し中国の諸藩を従えて京、大阪を席巻なし、錦旗を戴き討幕の旗上げをなさん所存で御座る、ついでには当藩もこの旗上げに御加担下さる

か、それとも反対めさるるか、いつれか御返答受け給りたく今日罷り来したる次第で御座る、若し吾藩の意向に御加担下さるなれば、その印として征討軍一万石に対して兵三名、軍資金千両武器弾薬として(砲何門に鉄砲等差し添えて)お借し下されたく備前藩迄届け下されば成功の暁には必ずこれに報るで御座ろう」と言うような口上であった。御使番の侍は直ちにこの由を御家老に申上げると、御家老自ら客間にお出ましになり、「遠路御苦勞で御座るが、いずれとも即答は致しかねる事なれば、ひとまず設け置きたる宿舎にお泊りあって御返答をお待ち下され」と直ちに馳走を響応し、城内に泊める事は評定の邪魔にもなるので、案内役をしてひとまず門前の紙屋(荒木)方に泊める事になった。使者は「いつれお早く」と言っただが、御殿内は急にあわただしく、振れ太鼓を打って家中中に触れ、横目は直ちに早馬で家中中を駆けめぐり、藩士総登城を促がした、藩士達はこの緊急会議に驚き、何事ならんと、おっ

食品の店

い ま や

さつき通り4丁目
TEL (62) 0169

とり刀で、三々五々として城内に集まった。(この時の評定の模様は小生が他日古岡本老人から聞いてメモした項があるので以下それについて書いてみる。岡本老人は当時十八九才の青年であったがこの評定の末席に列して居られたのでくわしく話してください。昭和十年頃の事で氏は八十五才位であった。)その時城内の大広間に集まった藩士の面々はいづれも興奮の色がみなぎり、御家老より長州藩の使者の口上を聞かされ、これに処するわが藩の対策をねるべく藩主を交えた全藩士の大評定が開かれた。これはわが藩の前途に大きく影響する事であるので、ある者は長州に加担せよ：ある者は長州に加担するは時機尚早と、ある者は徳川三百年の恩義をどうする：と甲論乙駁して議論は百出して会議は翌日から翌々日に渡り三日三晩の評定が開かれた。その間にも隣藩の様子を伺うために早馬が飛ばされて、容易に決しかねた。この飛札の報によると、赤穂藩は一日で決し、三日月藩も龍野藩も皆一昼夜に渡る



評定で決し長州に加担の意を表わし、林田藩の如きはさしたる評定もなく全藩揚げて長州に味方したが、唯一つ姫路藩のみは容易に決せず、大殿様は老中筆頭でもあり譜代の名門とあって重臣達は関東方を支持し一部の進歩派は牢にとじ込められていた。過激派をとき放し、全藩巴えの如くもみにもんだが、評定は容易にまとまらず、やはり酒井家は徳川四天王の一人でもあり大老職を出した家柄だけに上士の間には保守的勢力が強く、又姫路城は幕藩体制の初期より中国筋の押えとして山陽道の要衝にあり、特に西国の外様を抑制する任にあったのだから、その対面上討幕加担には容易に決しかねることは無理からぬことであった。山崎藩も支藩とはいえ徳川四天王の家柄で幕府に叛く事は関東方に申し訳がないと、特に上層の老臣達はとまどっていた。

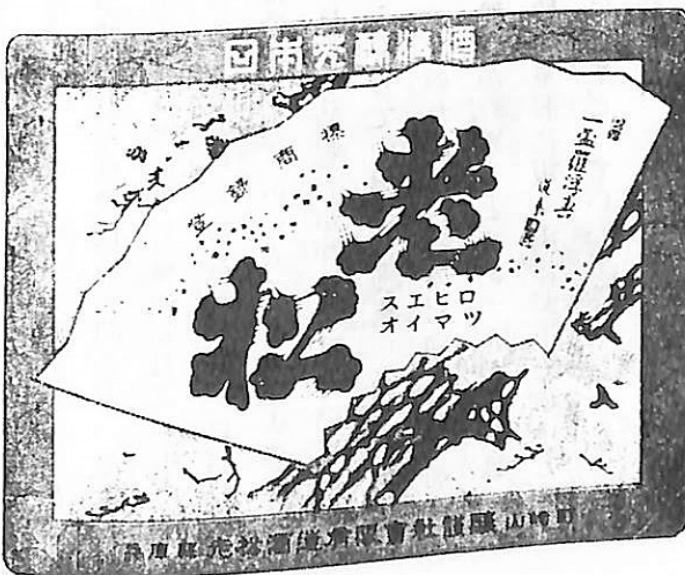
主君忠隣候は幕府の信頼も厚く、つい先頃までは大坂御定番の要職にあり、当時大坂城は幕府の本拠地となり、將軍は近年ほとんど大坂城に常住し、十四代將軍家茂が昨年大坂城で亡くなった時も藩主忠隣候は常に側近に侍り詰であった。十五代慶喜公が將軍職に付かれてからも側近にあって勤めていた。その信頼に対しても、今さらその公方様に弓を引くことは大義名分が立たなかった。しかもまだその時は幕府軍が必ず負けるといふ見通しはつかなかった。なので藩論は容易に決し得なかった。

しかし山崎藩にも少数ではあるが、柴田小膳、山本直方、安原昭之等の進歩派がいて、長州方を支持し「大政が奉還され王政復古が号令されたる今日薩長に反抗するのは即刻合戦となり領民を

戦火に巻き込み一万石の兵力では如何程抵抗しきれましようや勝敗は火を見るより明らかで中国筋の諸藩が既に長州方に降伏致しましたる以上、幕府の衰運は最早救い難く、大勢のおもむく所、殿には忍び難きを忍び長州方に従われ様御恭順おすすめ申上げます」と申し上げた。折しも探索方の飛札が到来し、姫路藩は備前軍の攻撃により市民は郊外に非難し始めたと言う。また一方紙屋に逗留の長州藩の使者からはあまりに返答が遅いのであと一日で返答なき時は当藩は幕府方とみなし攻撃の手段に出るといふ催促が通達された。そこで今まで寡黙であられた殿様も遂に口を切られ上段の間より「一同の者よく聞け、余はこの度残念ではあるがわが藩の将来のため、ひいては領民の戦火を避けるため長州に帰順致すであろう：併し乍ら將軍家に対する報恩の義も忘れる事なく必ず良きよう取り計うであろう。この議に付いてはいつれ後刻重臣共と相談致す事とし、ひと先づ評定は打ち切り、この由速やかに長州の使者に伝えよ」と仰せられた。一同恐感に伏し水を打ったる静けさに嗚咽の聲が漏れ聞かれたと言う。

そこで紙屋に宿泊中の使者へは、御使番の侍に柴田小膳が代表で付き添い、酒肴をたずさへ、返事の遅れた事を謝し、御要望の軍資金と武器弾薬は従軍の兵に持たせ備前藩へ届ける事を約した。一方城内では其の夜少数の重臣達が集まって藩主と共に密談が交わされ、大坂におわす將軍への顔向けとして、將軍守備の兵を若干送る事になった。翌日血気盛んな若侍達十数名が呼び出され、「今日各々方を呼び集めしは、ほかでもないがこの度当藩は、やも

得ず長州方に加担致す事に相成ったが、これはあくまで表向の事となしわが藩が受けし徳川家三百年の恩顧にむくいるために、又わが藩主忠隣公のお顔を立てるため、お気毒な上様の身辺を警護する様御前より仰せ出があった、そこで各々方には誠に御苦労で御座るがわが藩を代表してひそかに大坂表へ趣き岩崎又左衛門以下大坂詰の侍達と合体し將軍警護の任に当られたし、事は隠密を要する事とて、本街道は長州勢の見張りがあるかも知れず、また兵庫には薩摩の軍艦が定泊中と聞く、よってこれより福崎小野の裏街道を行き、三田有馬を経て出坂されたし、万一捕えられたその時は特に類が藩に及ばぬ様脱藩の士ということ。岩崎又左衛門には早飛脚で連絡を取って置く団体の旅はあやしまれるから二人つつ別行動で行く様」申し渡された。筆者の祖父もその一行に加わった。祖母の話ではその夜肌を鎖かたびらを着込み、軽武装の旅姿で真夜中に家を出て行ったという。毛利与五郎といっしよであったという。武

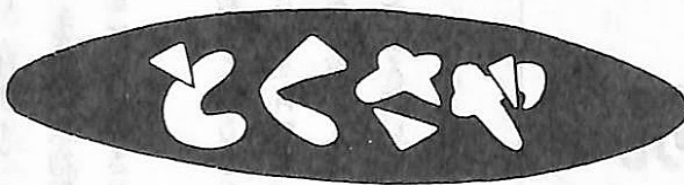


庫川尻や西宮には長州兵がたむろしているという情報があったので池田より十三を徑てようやく無事京橋の定番屋敷に入ったのは、慶応三年十二月晦日のことであった。

明けて翌日は慶応四年正月元旦、山崎を出た連中も追いおい着坂して無事人数はそろった。在坂の藩士合せて三十数名は軽武装を整え、執政岩崎左衛門の引率にて二日の早朝登城して城内紀州御殿におわす公方様に拝謁を申し出た。驚いたことに当日は近畿諸藩の藩兵が拝謁を願ひ出て家紋を染めぬいた藩旗が城内にひしめき、さすがに諸藩は、まだ幕府への忠誠を忘れず中国筋の諸藩まで加勢に駆けつけ二た股の両道を掛けていたのは山崎藩のみではなかった。安志藩も龍野藩も加わっていた。ほとんどの大名が二た股の両道をかけ幕府軍に加勢していたのである。幕府軍総勢一万五千、それに対する薩長は洛中洛外合せて四千五百、まだまだ幕府軍が敗れるとは思っていなかった。翌日三日は淀川沿いに京に向って進軍する彦根藩会津桑名藩に淀藩明石藩と混成の幕府軍は続いた。山崎藩は幕府鉄砲隊に加わり、フランス製のスナイドル銃を与えられ十三口と淀川口の二手に別れ警備に付いた。同日夕刻には伏見奉行所を守る新選組と薩長が戦端を開き砲声がにぶく冬空に響き、やがて火炎が空をこがし初めた、豆を炒る様な銃声が激しく後方にも聞えて来た、初めは薩長の軍船が負傷兵を乗せて淀川を下って来たので、川の土堤を守る幕府軍がそれを銃撃した。軽傷の兵隊は冬のさなかもいとわず水に飛び込み、浮つ沈みつ弾丸を避けていたそうである。夜になって戦いは一層激しくなり幕

府軍の敗報が伝わって来た。薩長の撃ち出す英国製のアームストロング砲は物凄い破壊力があり、幕兵の損傷は甚大であった。夜が明けて鳥羽街道より淀川の堤を敗走して来る会津桑名の藩兵はまことにいたましく、まるで地獄絵を見る様であったという。後方で無傷の馬に乗った幕府軍の無名の指揮官が「さがるな、さがるな、進め進めと督戦する混雑は一層激しくなる。幕府の混成軍は指揮が統制を欠き、結局訓練を欠いた鳥合の衆でしかなかった。しかも総勢の三分の一は京、大坂の博徒が軍夫として加わっていたのであった。

創業嘉永元年 きものと共に130余年
高級呉服の専門店



山崎町本町(さつき通)
☎(0790)62-1680代

春の研修旅行

大 上 善 示

五月十九日（日）午前六時三十分頃より、三々五々と今日の旅行を待ちかねたように、集まってこられた会員の方々、一六三名を乗せて、バスは四台、予定通り七時三十分、山崎を出発いたしました。

今年のテレビドラマ「私本太平記」（NHK）の舞台となっています。河内。楠氏ゆかりの地を目指してバスは中国道を走りましました。途中、名塩で小休止し、吹田ICから近畿道へ、松原ICを経て西名阪道へと入っていきましました。大阪近郊は渋滞を予想していましたが、思ったほどもなく、藤井寺ICに着きました。

一般道路におりてからは、やゝ混雑があり、目的地の河内観心寺への道は思ったより狭く、予定より少し遅れて、十時半頃に到着しました。

左手の山には赤坂城跡が、右手の山々の奥に千早城跡がある小高い山の中腹に観心寺がありました。かつて当時は、茶畑か桑畑が続き、雑木の奥に静まりかえっていたであろうと想像されるこの寺の山門に立った時、その立派なおどろきましました。

先ずはお参りをと中央にある金堂に向いました。本尊は如意輪観音菩薩で、平安時代の密教美術最高の仏像といわれており、国

室に指定されていますが、残念ながら、拝観することはできませんでした。金堂も国宝建造物であり、室町時代初期に建立され、以来たびたび修理され、昭和五十九年に大修理されましたが、それはそれは立派なものでした。

境内は広く、楠氏ゆかりのものが数多くありました。建掛塔（重要文化財）鎮守堂（重要文化財）などを拝観し、正成公首塚では、湊川での討死、尊氏の命によりその首がここに送られ、この塚に祀られていると書かれているのを読んで、北條氏滅亡後の戦乱の世を生きられた人々のことが思われて、一刻、時のとまる思いがしました。後

村上天皇行在所跡など、境内を一巡するほどに、山岳寺院の景観を心ゆくまで楽しませてもらいました。

「マイカーでは、とてもここまでようこんだろうなあ。」と思い、心嬉しくなりましたが、時刻の方は、予定より大分遅れてきました。あわててバスに乗車し、次の法隆寺へと向かいました。

外科・内科

山中医院

院長 山中陽一

山崎町西町・TEL②0036

法隆寺門前のレストランへ着いたのは、予定の十二時四十分、少し遅い昼食で、みなさんそれぞれ席についてすぐ食事をとられました。ゆっくりりする間もなく法隆寺の参拝となりました。

法隆寺は、修学旅行のメッカですから、各地からの中、高校生でにぎわっていました。

今から千三百年の昔、推古天皇と聖徳太子が建立せられた大伽藍で、本造建築の世界最古のもので、国宝、重文が五十五棟もあるそうです。有名な五重塔、金堂、大宝蔵殿、彫刻も世界的に価値の高い夢違観音、百済観音など、ゆっくりと見て歩きたいものばかりです。広い境内を急ぎ足で移動すると、疲れます。

みんな少々歩き疲れた表情でバスに乗りこんでこられました。それでもわずかな時間をさいて土産物を買われ、手に手に袋を下げてバスに入られました。予定の時刻から遅れて次の見学地平城京資料館へと向かいました。平城宮跡に降り立って、まず目についたのは緑の

旅行・観劇・航空券

すぐお応えいたします

百神姫観光

〒671-25 兵庫県宍粟郡山崎町鹿沢68
(神姫バス山崎待合所内)

TEL (0790) 62-7588

FAX (0790) 62-7589

柱状のものが、数多く立ち並んだ広大な平地でした。

資料館に入って、発掘調査を示したジオラマ模型や、発見された数々の遺物、模型などを見学しました。地下一メートルほどの所に埋まっていた昔の都をよくここまで調査されたものだと感じました。今は国の特別史跡として保存され、発掘調査が続けられていくのですが、この広い場所が、このように残されるまでには、多くの人々のたいへんなご苦労があったことでしょう。

資料館を出ますと、広い遺跡に復元された建物がありました。当時の姿そのままの築地・門があり、これが広い都の周囲にめぐらされていたのと想像し、短い期間の平城宮が、何かもったいな

いと思えました。
緑の柱状は、千三百年前の建物の柱の存在を示すために作られたものでした。ずっと彼方まで立っている柱、当時の人口十万と推定される奈良の都の壮大さが、目に見えます。

大極殿の跡地まで歩いてみました。ずっと南へ一直線に道がありました。かってその昔、当時の衣装を身につけた都人が、往来していた様が浮かんできました。

いにしへの 奈良の都の 八重桜
きよう九重に 匂いぬるかな と詠まれた歌がふと口をついて出ました。

つつい遅くなって、慌ててバスに帰りました。

天理市に向かってバスは走りだしました。天理市中心部を南へ、布留町布留山にある石上神宮(いそのかみ)が、最後の拝観地で

す。

巨木が林立する境内は、荘厳な雰囲気であつた。境内の広場で、宮司さんから神宮の由来をお聞きしました。

今から約二千五十年前に、布都御魂大神を祀るため建てられた、拝殿、摂社拝殿は国宝に、楼門が重要文化財に指定されているとのことでした。いろいろと説明されましたが、時間に追われて、ゆっくり拝観することもできず、すぐバスに引き返しました。

帰りは天理ICから高速に乗り、順調な車の流れの中、一路帰路につきました。途中、社で小休止し、山崎へ着いたのは、八時頃でした。予定より一時間遅れとなりましたが、旅行中は薄曇りで大変過ごしやすい一日であつたこと、参加者全員つつがなく家路につかれたこと、何よりでした。計画くださいました役員の方々に衷心よりお礼申し上げます。

文化会館前に経緯度標

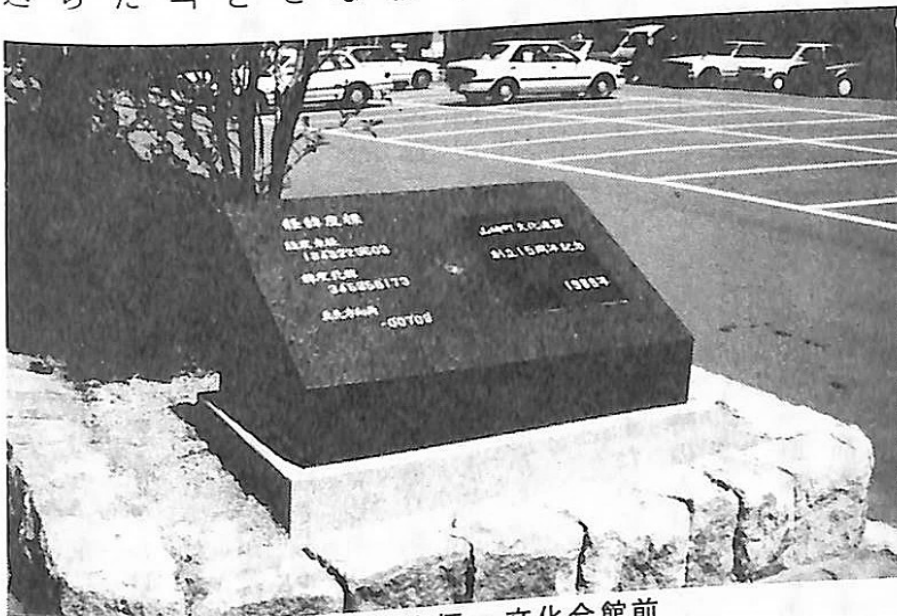
文化連盟の発足15周年を記念

山崎町文化連盟は発足十五周年を記念して、山崎文化会館前に石造の経緯度標を設置。五月十日完成除幕式を開き、町内有識者、

文化団体代表ら多数の人たちの見守る中、壺阪寿同連盟会長、安井淳三町長、北川金治郎町会議長、小畑欽之助教育長の手で除幕された。

経緯度標は幅一・二呎、奥行き八〇釐。東経一三四度三二分二九秒六〇三、北緯三四度五九分五八秒一七三の位置に、その数字を刻み込み、中央に九七・八呎の標高を示すポイントを埋めている。使用した石の産地はパプアニューギニアと中国。総工費は百四万円。

近年、情報手段の急速な進歩と交通機関の発達で、世界各地で発生する、いろいろの事柄が、直ぐに私たちの生活に影響することが多くなってきている。そこで、町の人たち、とくに若い人たちに「世界的視野にたった思考力を養ってもらおう」との願いを込



経緯度標 = 文化会館前

め、検討を重ねた上、十五周年記念事業として、地球の中の山崎の正確な位置を示した経緯度標を設置したものだ。同文化連盟では「この経緯度標を見ながら全世界に思いを馳せてほしい」と言っている。

山崎町と同じ北緯線上にある世界の国は韓国、中国、アフガニスタン、イラン、シリア、アラブ首長国連邦、キプロス、チュニジア、アルジェリア、モロッコ、アメリカ。国内の市町は西脇、京都、大津、四日市、佐用、新見、江津など。

同文化連盟は昭和四十九年、地域の飛躍的な文化の発展を目指し、町内の各種文化団体が加盟して発足。それ以来、機関誌「やまさき文化」の発行、芸能祭の開催など、多彩な文化事業を繰り広げており、現在、加盟は二十団体、会員は二千五百人。

(山崎町文化連盟
事務局)

表装全般

…古いものを
大切に…

表具師 **松本永春堂**

山崎町鹿沢本通り
TEL. 62-0122

楽しいくらしのお手伝い

ホームセンター

アグロ

竜野店

竜野市竜野町富永
☎(0791) 3-3226(代)

営業時間AM10:00~PM7:00
(定休日) 毎週水曜日

山崎店

宍粟郡山崎町今宿
☎(0790) 62-2434(代)

営業時間AM9:00~PM7:00
(定休日) 毎週水曜日

事務局だより

・秋の旅行案内を会報に挿入しています。

募集人員（九〇名）が定員に達し次第しめ切りになりますので、参加ご希望の方は早目にお申し込み下さい。

（山崎郷土研究会事務局）

山崎町

柳田

弘宅